



諫早市美術歴史館
開館記念特別企画展

文道全則 武威是備

諫早家ゆかりの品々展

「あいさつ」

諫早の歴史は、数々の遺跡により旧石器時代までさかのぼることができます。鎌倉時代の文書に「伊佐早村」の地名が初めて登場し、その後、「伊佐早庄」という荘園が成立しています。そして、天正十八（一五九〇）年、豊臣秀吉からこの地を治めることを認められたのが龍造寺家、後の諫早家です。現在我々が住む「諫早」が大まかな行政区画として成立したのは、まさにこのときだったと言えるでしょう。

さて諫早家は、天正十五（一五八七）年初代家晴公から第十六代一学公まで約二八〇年にわたります。この諫早の地を治められ、この間の出来事は「日記（日新記）」などの文書に詳細に記録されています。島原の乱への参陣や外国船の来航に備えた「長崎警備」、諫早一揆、眼鏡橋架橋などの大きな出来事のほかに、正月には約七千人もの庶民を屋敷に招いて食事を振舞われるなど、領民とは深いきずなで結ばれていたと伝えられています。

この度、諫早市美術・歴史館の開館を記念し、それにふさわしい特別企画展として「諫早家ゆかりの品々展」を開催します。展示品は諫早市郷土館に所蔵されていたものや、甲冑、仏像、絵画、調度品など、代々大切に保存され、企画展のために特別に協力いただいたもの、また、諫早図書館との連携による貴重な資料も展示しています。

数百年の時を経て現代まで伝えられたものとの出会いによって諫早の歴史や美術、文化を感じていただき、郷土を愛する心や市民としての誇り、未来を創造する力を育んでいただく機会となれば幸いに存じます。

最後に、本特別企画展の開催にあたり、貴重な資料につきまして様々なかたちでご協力いただいた関係機関、および関係の方々に、あつく御礼申し上げます、ごあいさつといたします。

諫早市長

宮本明雄

開催によせて

諫早市美術・歴史館の開館をお慶び申し上げます。

その栄えある開館記念の展示として、諫早家に関わりの深い品々が一堂に会し、みなさまのご高覧に供する機会を得ましたことを光榮に存じます。

このほど展示される運びとなりました品々を代々守り伝えてこられた方々、また、今回の展を企画し、展の実現へ向けてご尽力くださった方々に、深く感謝いたします。

亡父諫早英雄は、諫早史談会の山部淳先生のご助力のもとに、平成四年から三年間に渡り、第十一代茂圖公の歌集『柴小舟』と『友小舟』を「諫早史談」に紹介させていただきました。その折、「原本の美しい毛筆をたどって御覧頂く」ことができれば…、と述べておりました。今回の展でみなさまに間近に原本を見ていただけることを、ことのほか喜んでいるように感じられてなりません。手から手へ守り伝えられ、何百年もの時間をくぐりぬけて今に至ったものの前に立ちますと、言葉にできない畏敬の念をおぼえることがあります。美術的、象徴的な価値、あるいは、歴史を記録し、証するものとしての価値によって保存されてきたものではありませんが、その価値といえますものも、先人の営みを尊び、遺されたものをかけがえなく思う心から生まれてくるのではないでしょうか。最新の展示設備に迎えられて、誇らしく座する古いものたちは、そうした温かい思いに包まれてきたように見えてまいります。

伝えられたものを通して、なにを受け継ぎ、なにを託されたと感じるかは、一人ひとりの課題と
思うほかありません。歴史を通して、わたしたちの一人ひとりに宛てた贈物が手渡されると言ってもいいでしょう。諫早市に新しく開かれました美術・歴史館が、多くの人にとって、それぞれの贈物を受け取る場所となるよう願っております。

諫早道子

(諫早家第二十一代当主)

目次

ごあいさつ	諫早市長	宮本 明雄
開催によせて	諫早家第二十一代当主	諫早 道子
九州における龍造寺氏の興亡と諫早氏	諫早史談会会長	古賀 力
治		7
祈		19
武		25
麗		37
文		49
領主と領民のきずな	諫早市美術・歴史館	織田 武人
諫早家ゆかりの地		57
龍造寺家系図		58
諫早家系図		58
歴代領主事跡		59
出品目録		60
協力機関等一覧		

凡例

- 本図録は諫早市美術・歴史館が、平成26年3月1日（土）から4月29日（火）まで開催する開館記念特別企画展「諫早家ゆかりの品々展」の解説図録である。
- 本図録の図版番号は、企画展会場の陳列の順序とは必ずしも一致しない。
- 本図録に掲載されていても、展示替えや資料の状態のために展示されていない資料もある。
- 作品解説は、番号、名称、時代、法量、所蔵者、解説の順に記した。なお、個人名は記さず「個人蔵」とした。
- 領主の名前は旧字体とした。
- 掲載資料のうち、本市所蔵のもの多くは故諫早英雄氏、小野昭子氏から寄贈いただいたものである。
- 本図録の編集・構成・執筆は、諫早市美術・歴史館の川瀬雄一、織田武人、川内知子、大島大輔、諫早市教育委員会文化課の野澤哲朗、諫早市立諫早図書館の橋本桂一が担当した。
- 本図録に収録した写真は諫早市企画政策課が撮影した。ただし「伝シーボルト諫早侯献上ギヤマン酒次セット」については所蔵者である長崎歴史文化博物館、「明珍作うこん威甲冑 一領」（表紙写真）については株式会社昭和堂から提供を受けた。
- 本図録の作成にあたり、諫早史談会会長 古賀力氏の寄稿をいただいた。

九州における龍造寺氏の興亡と諫早氏

諫早史談会会長

古賀 力

出自

龍造寺氏の出自は藤原氏の流れを汲む藤原季家が鎌倉幕府より肥前国小津郡龍造寺村の地頭職に任ぜられ、龍造寺氏を称したとされている。室町時代末期から戦国時代にかけて本流である村中龍造寺氏が当主の死などで衰えたため、水ヶ江龍造寺氏が最も力を持つこととなった。

龍造寺氏の隆盛と衰退

応仁の乱以降続いた戦国時代も終わろうとする頃、九州では肥前の戦国大名龍造寺隆信が少弐氏、大友氏等と争いながら勢力を拡大しつつあり、大友氏と通じ軍を起こした高来の有馬氏とは永禄五（一五六二）年丹坂にさかの合戦で勝利を収め、一時は肥前の杵島、藤津の両郡まで勢力を拡げていた有馬氏は以後次第に勢力を失い、島原半島に撤退することとなる。天正五（一五七七）年には西南肥前の制圧を目指して各所に侵攻し伊佐早の西郷純堯も配下に収める。後に諫早氏初代となる龍造寺家晴は隆信のもとで常に軍勢の中心的存在として活躍し、天正八（一五八〇）年隆信は肥後征討の後、家晴を肥後南関の地に配し肥後、薩摩に備えた。

やがて隆信は佐嘉を中心に筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後・対馬の太守を称し、薩摩の島津氏と九州を二分する力になりつつあった。島津氏と同じ再び不穏な動きを見せる有馬氏に対し、天正十二（一五八四）年隆信は自ら大軍を率いて出陣した。有馬、島津の連合軍と島原の沖田なわてで

会戦し、隆信が討死すると、これがその後の龍造寺氏衰退につながってゆくことになる。

隆信亡き後、龍造寺政家及び一門・重臣は合意のもとに鍋島直茂と起請文を交わし、直茂に龍造寺氏による領国支配権を委任している。

鍋島氏の台頭

この頃中央にあつては織田信長亡き後、時流に乗って天下統一を目指す豊臣秀吉が着々とその施策をすすめ、天正十四（一五八六）年大友氏、龍造寺氏に島津討伐の軍を起こすよう使者をさしむける。翌天正十五（一五八七）年秀吉は配下の大名を従えて出陣し筑後高良山に本陣を構えた。龍造寺一統は大友氏の侵攻に対応するため結んでいた島津氏との和議を破棄して島津討伐軍に加わった。この時秀吉は隆信亡き後、後継の政家に龍造寺一統を統率してゆく器量がないとみたのか一統の中で政略、武略に並々ならぬ力量を示す鍋島信生（直茂）を重用するようになってゆく。圧倒的な秀吉の侵攻の前にさすがの島津義久も降伏し、和議となり決着した。秀吉は参戦した諸将に領地配分を行い龍造寺政家、鍋島信生（直茂）にもそれぞれ朱印状が下付された。

龍造寺家晴、伊佐早入部

龍造寺家晴が本拠とした筑後柳河の地は家晴には配分されず立花宗茂に配分される。そこで家晴は帰陣途中の秀吉を長門の赤間ヶ関（下関）まで

追いかけて愁訴。これにより肥前伊佐早の領主西郷信尚に換えて龍造寺家晴にその領地（二万二千五百二石五斗）を配分する朱印状が下付された。諫早家に伝わった『西郷記』によると天正十五（一五八七）年七月信重（家晴）は、領地明け渡しに応じない西郷氏に対して軍勢を率いて伊佐早に討ち入る。敗れた西郷氏は島原へ敗走し、一度は反撃するが再び敗れ、これより明治維新による封建時代が終わるまで諫早氏を称した領主の時代が続くこととなる。

佐嘉の領主は隆信亡き後、子の龍造寺政家が継いだが鍋島信生（直茂）が豊臣秀吉の承認で佐嘉を治め、軍役も代行するなど事実上の領主となつてゆくことになる。

文禄・慶長の役

豊臣秀吉が明征服の目的で起こした文禄・慶長の役には、龍造寺信重は文禄元（一五九二）年加藤清正を将とする第二軍に編成された鍋島直茂率いる佐嘉勢の部将として参戦している。戦役は慶長三（一五九八）年八月十八日秀吉の死去によって終息をむかえたが、ここで歴史の大きな変換点を迎える。

織豊時代から徳川時代へ

豊臣政権の内紛に端を発した大名同士の間立は、関ヶ原の戦に於いて徳川家康率いる東軍の勝利で終わる。鍋島勝茂は西軍に味方し伏見城攻撃などに参加したため大名として大きな危機を迎える。しかし筑後柳河の立花宗茂を攻略することを条件に本領を維持することができた。

龍造寺本家の断絶

慶長十二（一六〇七）年三月龍造寺高房は、夫人を刺殺し自らも自殺を図ったが未遂に終わる。一時回復に向かったが経過悪く九月に死去した。後を追うように父政家も十月に死去し、龍造寺本家は断絶した。

本家断絶に伴い公儀は龍造寺一門の信重（諫早）・安順（多久）・信照（須古）を江戸に呼び寄せ龍造寺本家の家督問題について意見を徴した。三人は鍋島との血縁関係や、直茂の龍造寺家への並々ならぬ働きをあげて直茂こそ家督を継承するに相応しいと説明し、しかし高齢であるためその子勝茂に相続させるべきと進言したと伝えられている。

佐賀藩の成立と諫早領

佐賀藩は慶長十（一六〇五）年から慶長十五（一六一〇）年に総検地を行い三十五万七千三十六石五斗九升九合を打出した。慶長十八（一六一三）年公儀はこれを公認し安堵の朱印状が交付された。こうして肥前佐賀藩三十五万七千三十六石の近世大名が誕生した。

佐賀藩の支配体制は本藩・三家・親類・親類同格・家老・着座で構成し、親類同格には諫早・武雄・多久・須古が龍造寺系重要家臣として配され、伊佐早の地は龍造寺から諫早に改姓した諫早氏が知行する佐賀藩諫早領となった。

治

諫早茂圖自画賛



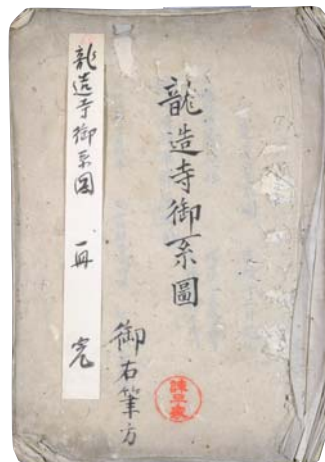
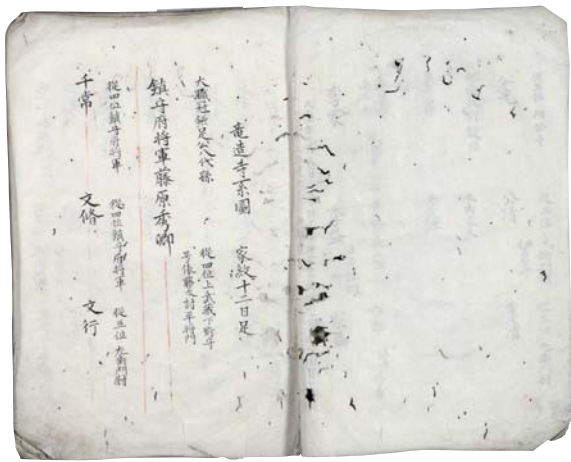
天正十五（一五八七）年、諫早家初代龍造寺家晴公は伊佐早の新たな領主となり、第二代直孝公の時に「諫早」と改姓した。慶長十二（一六〇七）年に佐賀鍋島藩が成立、元禄十二（一六九九）年、諫早家は須古、多久、武雄と並び龍造寺系の四家の一つとして「親類同格」に位置づけられた。以降、明治維新まで（第十六代一学公）諫早家は領主として約二八〇年間にわたってこの地を治めた。

ここでは豊臣秀吉が天正十八（一五九〇）年三月に家晴公に出した朱印状のレプリカ、同年一月に高房（龍造寺隆信の孫）に出した朱印状など、近世諫早のなりたちに関わりが大きい資料を展示した。歴代領主のうち、

六・八・十二・十三・十四代領主やその室などの肖像画は保存状態が良い貴重な史料である。当時の人物の表情や服装などが視覚的にイメージされるだけでなく、背景に描かれている調度品からも主題となる人物の人となりが浮かび上がる。諫早の地を治め、歴史を見つめ、領民に尽力してきた領主のすがたを鮮明に見ることができ



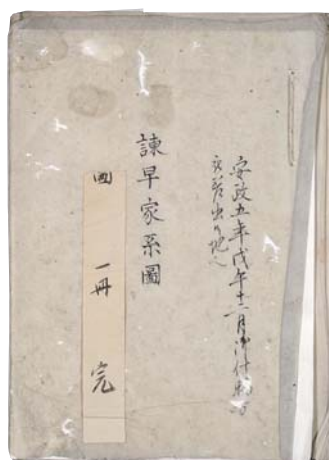
「諫早茂圖像」



1 龍造寺御系図 (写)

天保3(1832)年
縦31.0cm 横21.0cm
諫早市立諫早図書館蔵

諫早家は水ヶ江龍造寺の流れをくむ家系である。天保3(1832)年の写本で、藤原秀郷より高房までの系図が書かれており、諫早家も初代家晴公、2代直孝公の記載がある。



2 諫早家系図

安政5(1858)年・明治時代
縦27.0cm 横20.0cm
諫早市立諫早図書館蔵

安政5(1858)年什物方差出の記録で、初代家晴公から第14代茂孫公までの系図と、その後追録されたと思われる第19代不二雄氏までの系図が書かれている。



拡大

3 山鹿郡之絵図：南関手永絵図

江戸時代カ 縦107.0cm 横91.0cm 熊本学園大学付属図書館蔵

龍造寺家晴公は天正8(1580)年に南関(熊本県玉名郡南関町)に滞留していたといわれている。家晴公は龍造寺隆信のもとで常に軍勢の中心的存在として活躍し、天正8(1580)年隆信は肥後征討の後、家晴公を南関の地に配し肥後、薩摩に備えた。絵図には「弥原堤」、「家治館」、「大津山資冬竜造寺隆信ニ属メ肥前佐賀へ在リケルトキ竜造寺安房守家治此所ニ住ス」と記載されている(拡大図中央)。

4 元禄図

元禄10(1697)年カ 諫早市立諫早図書館蔵

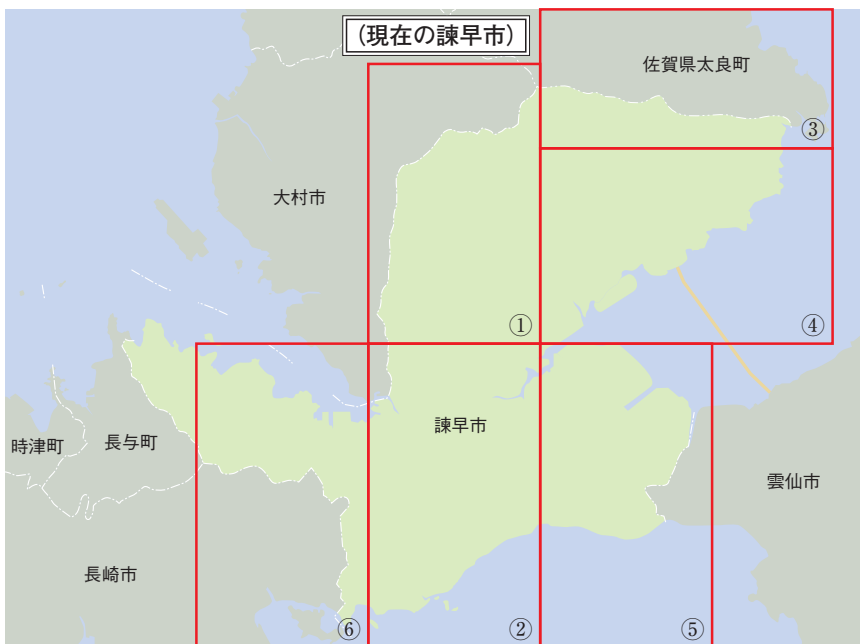
作成年代は判然としないが、『家系事蹟』の元禄10(1697)年の条に「諫早地輿ノ図成」とあるのがこの絵図と思われる。絵図は佐賀藩に提出しているのが原本の写しと思われる。様々な色で彩色されており、道筋や河川はもちろんのこと寺社・城跡・地名・一里塚等が書かれている。特に慶長・元和と三部上知により諫早領内に佐賀藩、佐賀藩深堀領、佐賀藩家臣の領地が存在するため、それらの土地と諫早領の土地は複雑に描かれている。
※絵図名の()内は諫早市立諫早図書館の史料名である。



①元禄図(領内部分図 [旧図]) 縦218.0cm 横330.0cm



②元禄図(諫早領内大地図) 縦363.0cm 横207.0cm



(図中の番号は各絵図の番号と一致する)



③元禄図（領内南部分図）縦340.0cm 横462.0cm



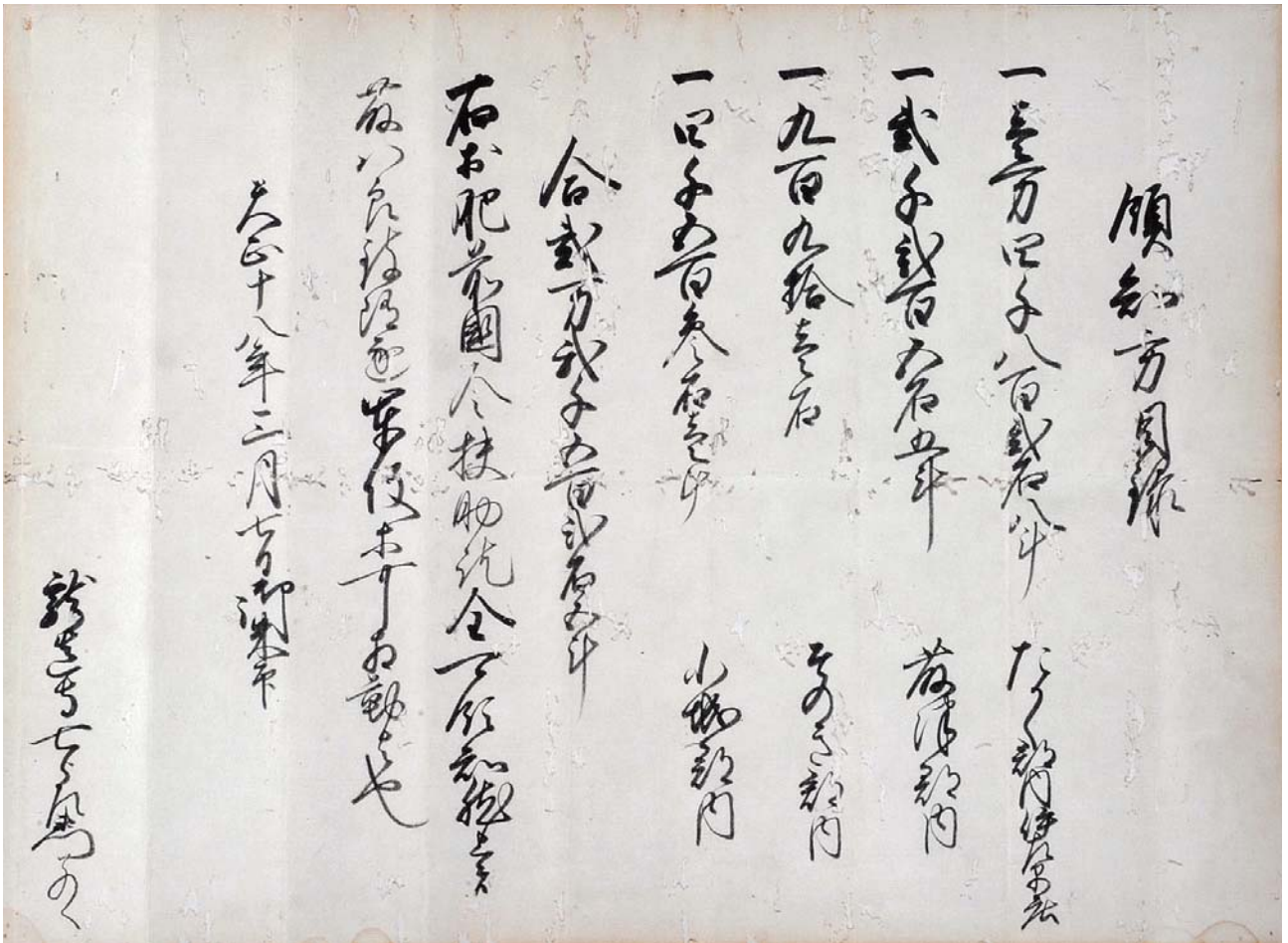
④元禄図（領内部分図）縦200.0cm 横266.0cm



⑤元禄図（領内部分図）縦222.0cm 横320.0cm



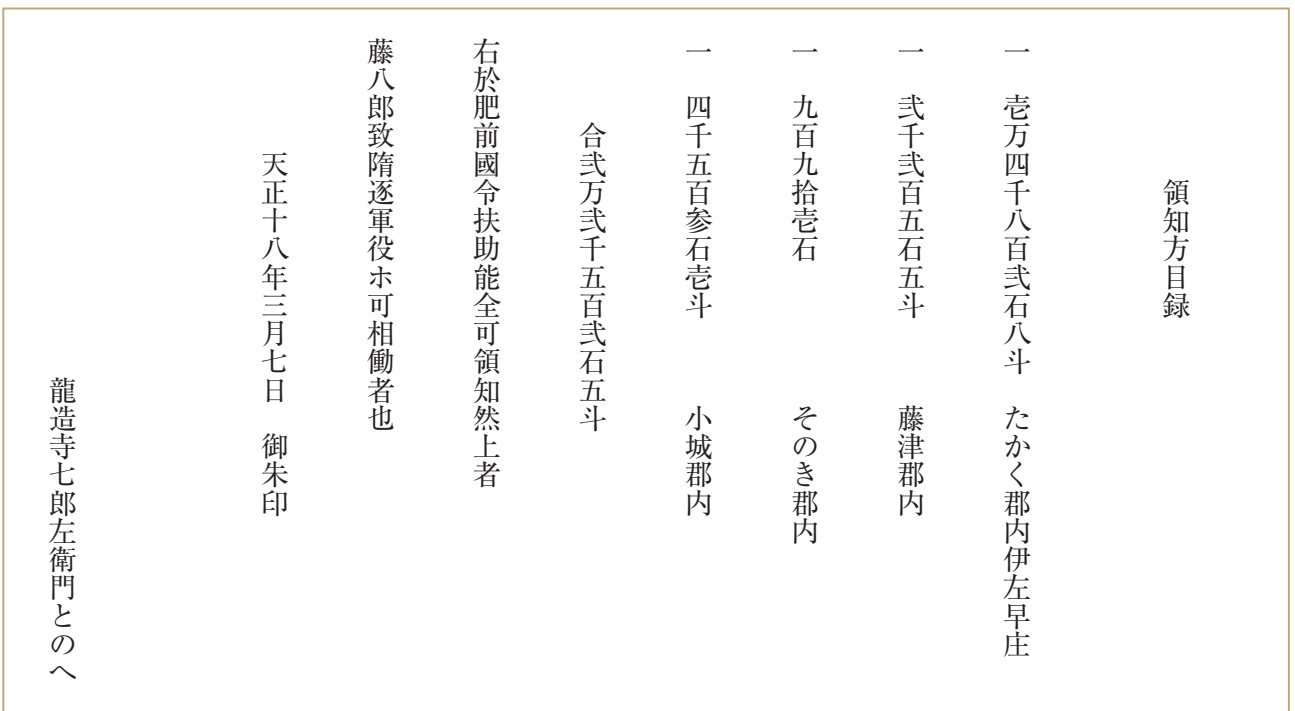
⑥元禄図（矢上久山地図）縦243.0cm 横323.0cm



5 豊臣秀吉朱印状（写）

天正18(1590)年3月7日 縦38.5cm 横52.5cm 個人蔵

豊臣秀吉が龍造寺七郎左衛門（家晴）へ出した知行目録の写しである。
これにより、龍造寺家晴は22,502石5斗が安堵されたことがわかる。



領知方目録

一 壹万四千八百貳石八斗 たかく郡内伊左早庄

一 貳千貳百五石五斗 藤津郡内

一 九百九拾壹石 そのき郡内

一 四千五百参石壹斗 小城郡内

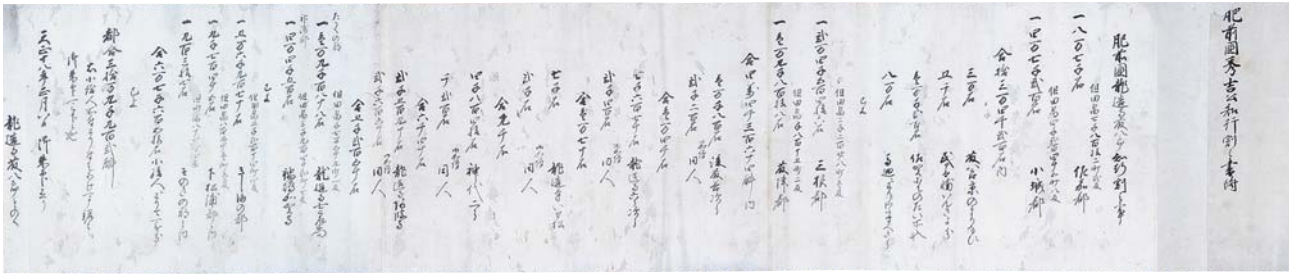
合貳万貳千五百貳石五斗

右於肥前國令扶助能全可領知然上者

藤八郎致隨逐軍役ホ可相働者也

天正十八年三月七日 御朱印

龍造寺七郎左衛門とのへ



6 豊臣秀吉朱印状 (写)

天正18(1590)年1月8日 縦31.5cm 横152.7cm 徳養寺蔵

豊臣秀吉より龍造寺藤八郎(高房・龍造寺隆信の孫)に宛てた朱印状の写しである。「肥前国秀吉公知行割之書附」(包紙)、「肥前国龍造寺藤八郎知行割之事」の書き出しから始まる。龍造寺高房をはじめとする龍造寺家の家臣の知行割が書かれており、309,902石が安堵されたことがわかる。



7 豊臣秀吉朱印状 (写)

天正15(1587)年カ11月15日 縦18.6cm 横103.8cm 徳養寺蔵

豊臣秀吉から龍造寺七郎左衛門(家晴)に宛てた朱印状の写しである。龍造寺家晴が肥後一揆鎮撫に赴いている際に西郷が攻め入ったことへの憂いと西郷氏を討ち果たすとの内容が書かれている。



8 豊臣秀吉朱印状 (写)

天正15(1587)年カ11月15日 縦18.7cm 横103.7cm 徳養寺蔵

豊臣秀吉から龍造寺民部太輔(政家・龍造寺隆信の子)に宛てた朱印状の写しである。肥後一揆鎮撫などが箇条書で書かれている。この日、龍造寺七郎左衛門(家晴)、鍋嶋飛騨守(勝茂)へも朱印状が出されている。



11 諫早茂圖公像 (第11代領主)

江戸時代 縦132.5cm 横54.0cm 天祐寺蔵

諫早茂圖公 (1746~1815) は、第8代茂行公の三男として生まれ、明和6 (1769) 年兄である第10代茂成公を継ぎ、第11代となる。在職期間は歴代領主の中で最も長い。法名は徳明軒殿慈心澤雲大居士。



9 諫早茂元公像 (第6代領主)

江戸時代 縦91.0cm 横49.5cm 天祐寺蔵

諫早茂元公 (1665~1694) は、第4代茂真公の五男として生まれ、兄である第5代茂門公の跡を継ぎ、延宝8 (1680) 年第6代となる。法名は撮空軒主賢忠實良居士。



10 諫早茂行公像 (第8代領主)

江戸時代 縦89.2cm 横39.4cm 諫早市美術・歴史館蔵

諫早茂行公 (1714~1765) は、第7代茂晴公の二男として生まれ、享保17 (1732) 年第8代となる。法名は雲龍軒殿威霖道澍。



13 澄月院像 (第12代茂洪公室 澄)

江戸時代 縦108.0cm 横43.0cm 天祐寺蔵

鹿島藩第6代直宣公の三女として生まれ、文化11(1814)年第12代茂洪公へ輿入れする。法名は澄月院殿松巖仙壽大姉。



12 諫早茂洪公像 (第12代領主)

江戸時代 縦108.0cm 横43.0cm 天祐寺蔵

諫早茂洪公(1797~1845)は、第11代茂圖公の長男敬輝の長男として生まれる。茂圖公の隠居にともない文化9(1812)年第12代となる。法名は徳巖院殿義運全忠大居士。



15 心鏡院像 (第13代茂喬公室 民)

江戸時代 縦106.0cm 横42.0cm 天祐寺蔵

佐賀藩第9代齊正公の十八女として生まれ、弘化2(1845)年第13代茂喬公へ輿入れする。法名は心鏡院殿光顔常輝大姉。



14 諫早茂喬公像 (第13代領主)

江戸時代 縦106.0cm 横42.0cm 天祐寺蔵

諫早茂喬公(1824~1847)は、第12代茂洪公の四男として生まれる。弘化2(1845)年第13代となる。法名は龍俊院殿帶岳興雲大居士。



17 諫早武春公像 (第15代領主)

江戸時代 縦102.0cm 横41.0cm 天祐寺蔵

諫早武春公 (1847~1862) は、第13代茂喬公の長男として生まれる。嘉永5 (1852) 年第15代となる。法名は恭徳院殿温冲良潤大居士。



16 諫早茂孫公像 (第14代領主)

江戸時代 縦105.0cm 横42.5cm 天祐寺蔵

諫早茂孫公 (1825~1866) は、第12代茂洪公の七男として生まれる。嘉永元 (1848) 年第14代となる。法名は長栄院殿無敵高健大居士。



19 哲仙院像 (第11代茂圖公長男敬輝室 哲)

江戸時代 縦116.0cm 横42.0cm 天祐寺蔵



18 哲仙院像 (第11代茂圖公長男敬輝室 哲)

江戸時代 縦127.0cm 横54.0cm 天祐寺蔵

佐賀藩第8代治茂公の三女として生まれ、寛政7 (1795) 年第11代茂圖公の長男敬輝へ輿入れする。敬輝は茂圖公より先に逝去する。文政8 (1825) 年建立の諫江八十八ヶ所を發願。法名は哲仙院殿月心清光大姉。



21 ^{えいほういん}英芳院像 (第12代茂洪公二女 英)
江戸時代 縦146.0cm 横75.0cm 天祐寺蔵
第12代茂洪公の二女として生まれ、天保3 (1832) 年佐賀藩第9代齊正公の養女となる。法名は英芳院賢室妙貞大姉。



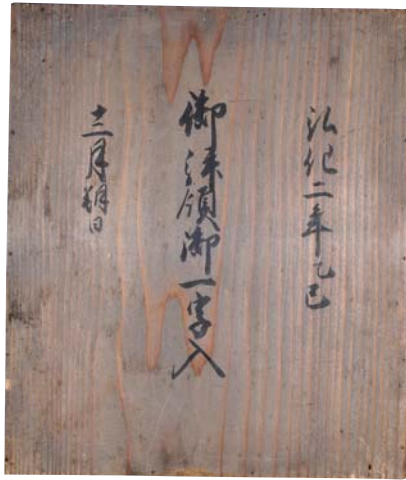
20 ^{みょうしょういん}明照院像 (第16代一学公室 婉)
江戸時代 縦107.7cm 横41.0cm 天祐寺蔵
蓮池藩第8代直興公の長女として生まれ、文久2 (1862) 年第16代一学公へ輿入れする。法名は明照院貞質智光大姉。



23 ^{てんそういん}天聰院像 (第16代一学公 子息)
江戸時代 縦104.5cm 横43.0cm 天祐寺蔵
法名は天聰院殿辟臨靡光大童子。



22 ^{ちきょういん}智鏡院像 (第16代一学公女 規)
江戸時代 縦88.0cm 横39.5cm 天祐寺蔵
法名は智鏡院殿玉操自負禪童女。



③



②

④

①

24 御一字御拝領書附

諫早市美術・歴史館蔵

諫早家では家督相続の際に佐賀藩主より「茂」の一字を拝領している。

- | | | | |
|----------|-----------------|---------|---------|
| ①第11代茂圖公 | 明和8(1771)年10月1日 | 縦51.8cm | 横67.0cm |
| ②第12代茂洪公 | 文化9(1812)年12月1日 | 縦51.9cm | 横66.0cm |
| ③第13代茂喬公 | 弘化2(1845)年12月1日 | 縦52.8cm | 横64.5cm |
| ④第14代茂孫公 | 嘉永元(1848)年6月15日 | 縦52.8cm | 横64.5cm |